

いじめられっ子はインクの悪魔と共に嗤う

火壁

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【あらすじ】

人間なんて大嫌いだ。

欲望に忠実で、すぐに人を裏切る。自分より弱い相手を見つければ  
躊躇なく、搾取し、ゴミ同然に切り捨てる。

ああ、神様。

なんでこんな世界があるんですか。

こんな世界

消えてしまえ。

そう世界を怨む少年の前に、悪魔が一人。

『俺と契約しろ』

少年はこの悪魔に何を見る。

目

次

少年は悪魔と契約する

少年は敵を嗤う

嗤う悪魔に厄来たる

18 10 1

# 少年は悪魔と契約する

人間なんて大嫌いだ。

欲望に忠実でそのためなら他者なんて平氣で陥れ、よつてたかつて  
躊躇り続ける。それで僕はずつと一人だった。

僕の両親も魔獣討伐戦に駆り出されてそのまま戦死した。その戦  
いで出た利益は貴族が独占した。

学校の連中もいつも僕を虐めて笑う。周りの奴も笑うだけで助け  
ようともしない。助けてくれる人がいてもその人が理由で更に殴ら  
れる。

こんな世界なんであるんだろう。魔王の方が人道的とかいうオチ  
じやないだろうか。

ああ、

こんな世界、消えてしまえばいいのに

王国王都

聖ジョーイ魔闘学園

僕の名前は”アンク・アンジュ”この学園の生徒……だけど落ちこ  
ぼれで、皆から嫌われる。それで今日は僕にとつて良くない日。  
「皆さん、今日は王都で各産業について社会見学を行います。各自で  
好きなところに赴き、そこで学んだことをレポートにまとめてください

い。時間は午後5時までです。それまでにこの噴水広場に集合です  
ので遅れないよう。では一時解散です」

今日は魔闘学校、聖ジョーイ学園1年の社会見学会。王都で興つて  
いる産業の中から一つを選んで、そこで学んだことをレポートにまと  
めるんだけど、

「おや／＼これはボツチで落ちこぼれのアンク君じやあないか／＼。これ  
からどこいくんだい？何なら俺たちも連れていくつてくれよお／＼」

いつも僕を苛める4人組、ジラーニ、デジール、ティペッシユ、そ  
してドムだ。なんでいつも絡んでくるのかなあ。こういう感じで苛  
めグループが僕を目の敵にする。1人だからなおさら狙いやすい。

「やめておけよジラーニ。そんな奴といたら落ちこぼれがうつつちま  
うよ w」

「そうだな／＼こんなゴミ、相手するだけ損か w……おい、いい加減サリ  
アに付きまとくな。お前うぜえんだよ。それ自覚してんの？ サリ  
アだつて迷惑してるつて気づかないのかなあ？ そんなこともわか  
んないんでもちゅかあ／＼？」

「ぼ、僕が付きまとつてるわけじや」ドゴオ「うぐう！」

「あのね、言い訳はいらないのよ。俺は寛大にもお前がサリアに関わ  
らなけりやいいだけつて言つてんじやん。そうすりや皆ハッピー。  
お前は皆にとつて悪そのものなんだよ。だからよ、頼むわ。もう二度  
とその面見せんな!!」ドガツ

「ぐうつ……ゴホッ……ゴホッ」

「うわつきつたねえ！ ふざけんじやねえよ！」ドガツ

「まあまあ、その辺にしとけよ。おい、俺が言いたい事は大体ジラーニ  
と一緒に。サリアに近づくな。あいつは俺の女なんだからな」

ドムが僕の髪を鷲掴みにしながら言う。見向きもされてない奴が  
何言つてんだか。

「なんだその目は。まあいいさ。これに懲りたらもう近づかないこつ  
た。これは忠告なんだから俺たちに感謝しろよ？ これはお前のた  
めなんだからな」

そういう捨てる笑いながら歩いていった。眼鏡は無事なようだ。

無事だからよかつたけど、割れたらどうするつもりだつたんだ。いや、あいつらはそんなこと考えないか。

すると向こうから、

「また派手にやられたわね。怪我は大丈夫？」

さつきあいつらの口から出てきた“サリア・アモロソ”。才色兼備、文武両道とは彼女のことを言うのだろう。唯一の彼女の汚点と言えば、僕と幼馴染つてところかな。それ程彼女は完璧なんだ。

「いつものことだよ。大丈夫だから」

「でもたまにはやり返しなさいよ。こっちが見てて気分が悪いわ」

「無理だよ。あっちの方が強いし、僕じや勝てない。それよりサリア。やっぱり僕に関わらない方がいいって」

「なんですよ」

「だつて何をやらせても完璧なサリアに僕みたいな落ちこぼれが一緒にいたらサリアが変な目で見られちゃうよ」

「そんなこと気にする暇があるなら少しでも魔法の訓練でもしない。落ちこぼれつて自覚があるならなおさらよ。今日だつてこっちに来ないで訓練するべきだつていうのに。じゃ、私は行くから」

そう言うだけ言つてサリアはさつさと行つてしまつた。結局何がしたかつたんだろう。

「何だよ。何が楽しくつて皆して僕を苛めるんだよ。僕だつて好きでこうなつたわけじゃないのに」

目に浮かぶ涙を拭つて、僕は見学先に向かつた。

「よし、行つたな。行くぞ」

「おし。でもなんでこんな周りくどいことするんだ？ 普通にボコせばいいじやんよ」

「わかつてねえな。あいつはたとえ腕折つてもサリアにくつ付いたまんまだ。サリアに付く悪い虫は文字通り駆除しないとな」

「おつほおく悪い顔してんねえ！ まああいつには悪いけど、これも

俺たちがサリアと付き合うようになるためと思つて退場してもらおうかねえ」

「ヒツヒツヒツヒ／クツクツクツクツク」

「アンクウ、お前は皆の邪魔なんだよ。お前がいるからサリアと喋ることだつてできねえ。悪いけど消えてくれ。それが、皆のためなんだ」

### 見学先 インク工場

「いや～まさか学園から見学者が来てくれるなんてなあ！　来てくれてありがとうね！」

僕は王都のインク工房に来てる。インクはいい。書物を書くのには全てインクを必要とする。その黒の液体は沢山の物語を紡ぎ、記録を残し、それはこれからも続していくのだろう。その工房を見ることは密かな憧れだつたのだ。

「はい。見学の許可をください、ありがとうございます」

「いいんだよ。学園から見学に来てくれたつてだけで嬉しくなる。自分のとこのものに箔がつくからね。じゃあさつそくだけど案内するよ」

そうして工房の見学が始まつた。僕は中の機械に胸を躍らせっぱなしだ。

「そういうえば、なんで見学先がここなんだい？　学園の生徒なら魔導書館とか色々あるだろうに」

「インクつて物事を書くために必要じゃないですか。この黒の液体はこの世の全部を記すなんてロマンだと思うんです。そんなインクをつくる工房を見るのがちょっと憧れだつたりするんですよ」

「はつはつは！　そりやいい！　じやあとことん見せてやらないとな！」

こうして色々な所を見せてもらい、本当に充実した時間だった。この時間は皆のことを見ることが出来た。

「よーし、これで見せるところは大体全部だよ。わかつてもらえたかな？」

「はい！　ただこれを基にレポートを作らないといけないのでもう少し見ていたいんですけどいいですか？」

「いいよいよ。じっくり見てつて立派なレポートつくつてな！」

「はい！」

工房主のおじさんから許可を貰つて、僕は工房で見学を続ける。

「これが確かインクを溜める機械か……この中にインクが沢山詰まつてるってすごいなあ」

僕は工房の奥に鎮座するインク貯蔵機を見ている。それは正しく壮観で、いつまで見ても飽きない代物だ。

「王都にしかないっていうけど、これが国中にできるつてなると一体いくらかかるんだろう。それよりこれはどうやつて動くのかな？魔導回路が通つている感じもしないし、となると地下水道のポンプを応用してるのかな？　でも貯蔵箇所がわかんないや」

そうやって僕が思案していると、

「あつれえ～。誰かと思えばアンク君じゃないか～さつきぶりだねえ」

振り返つたら今朝の4人組がいた。なんで!?　ここには絶対来なって思つてたのに！

「実を言うとね～、アンク君。君にお別れを言おうと思つて來たんだ

」

？　何を言つているんだ？　僕は引っ越しの予定も無いし、彼らが引っ越すのか？　でもそんなこと僕に言う奴らじやないし  
「もう鈍くさいなあ～。君が死ぬからさよならつてことだよ！」

「……え？」

僕が呆気にとられていると、ドムが前に出てきた

「俺たちは、お前が前からうざいって思つてたんだ。落ちこぼれのくせにサリアにいつもいつも助けられてよお、恥ずかしいって思わないわけ？」男が女に助けられてさ。それにお前は腕を切り落としても離れねえってわかつた。だからここで事故にあつてもらう。心配すんな。サリアは俺たちが可愛がつてやるよ」

気持ち悪い笑みを浮かべてドムが僕を睨みつける。そんなことよりサリアをどうするつて？　お前たちは見向きもされてないのに大層な自信だ。

「……やつぱりその目は気に入らねえ。よーしわかつた！　そんなに俺たちに逆らうつてなら、このおつさんもやつちまつていいな！」

「！」

そこには工房主のおじさんが顔に痣をつくつて倒れていた。  
「なんで……なんでなんだよ！　僕一人を狙えばいいじゃないか！  
なんでおじさんまでこんな目にあわせるんだよ！」

「お前やつぱわかつてねえな。こいつはお前のせいで死ぬんだよ！  
お前が逆らわなければ死ぬこともなかつたのになあ！　ま、恨むんならアンクを恨めよおつさん！」

ヒヤハハハハハハハハ！

残りの3人が汚い笑い声をあげる。

「おじさん。おじさん！」

「あ、アンク君。君は悪くない。悪いのは全部こいつらだ。君が気に病むことはないよ」

「おじさん……」

「んだけど……ただの平民風情が！　魔闘師様に向かつて大層な口きくじやねえか！　そうかい、そんなに死にたいなら殺してやるよ！」

ドムの手に青のオーラが集中する。

「死ね！」

ズシャツ

「ぐふつ……」ドサ

おじさんは血だまりの中で数回痙攣してそのまま動かなくなつた。

「ああ、ああああああ、おじさん。おじさああああああああああああ

あああああああんん!!

「はつはつはつは!! あゝあ、死んじやつた。お前のせいだぞアンク。  
お前が言う事を聞いておけばこんなことにはならなかつたのに。さて、次はお前が死ぬ番だ。まあお前はここを爆発して殺せばいい。爆  
発事故つてんなら俺たちに容疑はかかるねえ。んじゃ、バイバイアン  
ク君」

ドムたちは僕をインク貯蔵機に拘束して逃げるよう而去つていつ  
た。

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
待  
てええええええええええええええええええええええええええええ  
ええええええええええええええええええええええええええええ  
ええええええええええええええええええええええええええええ  
!!!」

あいつらが工房を出てから所々から火が回つてきた。

「くそ! やつぱり僕はいない方がよかつたんだ……ううつ、おじさ  
ん、ごめんなさい」

動かなくなつたおじさんに謝る。でも涙が止まらなくて声がうわ  
ずる。

「なんで、なんでここまでできるんだよ……ふざけんな……クソツタ  
レ」

そして視界が白ける。爆発したのかな。 まあもう関係ないか。

『あ～あ、死んじまつたな。お前さん』

『なんだ。何かが喋つてる。

『あんなんにやられちまつて、ドンマイとしか言いようがねえな』  
うるさい。お前に何が分かるつて言うんだ。

『わかんねえよ。負け犬の遠吠えなんぞ』

クソッ。何だつてんだよ！

『まあ落ち着け。こうして話してるのはお前さんにいい話を持ち掛けに来たんだ』

『話？ つてもう死んでるのに話なんか……』

『そうだな。だが、生き返るつてなつたらそうでもねえだろ？』

……は？

『お前さんの人生は言つちまえば災難の連続だつた。親が死に、周囲から虐げられ、それでこれだ。俺は悪魔だが、同情だつてする。だからいい話を持つて來たんだ』

そういうと自称悪魔が軽く息を吸い、雰囲気を改めること、

『俺と契約しろ。そうすればお前は生き返る』

……？ 何を言つてるんだ？ 第一悪魔と契約なんて

『おっと、そんなことを言うが言つたろ？ 同情してるんだつて。だから生き返らせて人生リスタートしようぜつて』

でもそういうのつて契約の代償で魂が食われたりとかあるんじや

……？

『確かにそういう奴はいる。でも今回は魂を融合させて俺の力をくれてやるつてことよ。だから代償はお前の魂の融合と体の共有だ。おかげ？』

……

『あいつらに復讐しろとはいわねえさ。でも、幸福を掴むくらいはいいじやねえか。あいつらには仕返しくらいしても罰は当たらねえよ』

…… ただけど

『それにサリアだつけ？ あの子はどうするんだい？』

!?

『あの子はこのままだと何しでかすかわからんねえぞ。下手すれば死ぬかも』

な、なんでそんな事……

『そこは君が確かにきや。さあどうする？　ここまで来て嫌ですってかい？　気にならないの？　彼女の気持ち』

……わかった。契約……するよ。

『そうだ！　それでこそ人間！　欲望の為に、そして俺の楽しみの為に頑張ってくれ!!』

そういうつて悪魔は小さい玉になつて僕の中に入つていつた。

そうだ。君の名前は？

『名前？　んーそうだな。と言つてももう話すこともないし必要ないんじやないか？』

それでもだよ。ないなら僕が決めるけど、いいかい？

『構わねえよ。ほらさつさとしろ。もう時間ねえぞ』

そうだね……どんな力を使えるの？

『力？　俺はインク操るだけだ。それでも普通の人間よか全然強いがな』

そうか……じゃあ“インキー”なんてどうかな。安直だけど。

『インキーだあ？　お前ネーミングセンス皆無かよ。まあいいか。インキーな』

うん。よろしく、インキー！

『あいよ。じゃ、魂の融合を始めるぜ！』

そういうインキーが言うと、体が中からかき混ぜられるような、不思議な感覚に襲われた。僕ともう一つの魂、インキーの魂が混ざついく。段々と僕という感覚が消えていく。僕が消えて、俺が生まれる。

『さて、ハッピーバースデー俺。今日が俺の……誕生日だ！』

## 少年は敵を嗤う

サリア side in

ザワザワ

「先程アンジユ君の行つたインク工房で爆発事故が起こつたようです。我々教師で様子を見に行きますから皆さんはこのまま下校してください。決して現場に近づいてはいけませんよ」

先生が機械的にそう告げて行つてしまつた。インク工房にそんな危険物があるつていうの？ いやそんな事は重要じやない。

アンクが爆発に巻き込まれた……！ アンクが……死んだ？ 嫌、そんなことない。アンクが死ぬなんて無い！ アンクは私が守るつて決めたんだもの。死ぬなんて……ダメ……ダメだよ……アンク「サリア。大丈夫だよ。アンク君が死ぬわけないじやないか。だから俺たちと帰ろう？ 明日には学校に来てるつて」

ドムがそう言つて私の肩に触れる。正直言つてやめてほしい。あんたたちに触られたくない。私に触れていいのはアンクだけ。アンクがどれだけ凄いのかあんたたちは全く理解してないのに分かつたような口聞かないでよ！

「大丈夫よ、私は1人で帰るから。じゃあね」

私は早くここから立ち去りたかった。ここじゃ気が触れてしまいそうだから。

でもあいつらはしつこく私に言い寄つてくる。私が嫌な顔をしてるつて気づかないのかな。

「あんな爆破があつたんだ。気が触れた魔闘師がいるかも知れないよ。ここは俺たちが護衛するよ！」

1人でいいつていうのになんでこんなにしつこいの。こいつらアンクを悪だなんだ言つてるけど私からしたらアンクをいつも苛めるこいつらの方がよっぽど悪人だわ。

「いいつて言つてるじゃない。私は1人で大丈夫だから1人にさせてよ」

「そもそもいかない。危険だつてのはサリアも分かつてゐるだろう？」

だつたらここは俺たちの出番じやないか」

「……もういいから1人にしてよ」

私は冷たくドムに言い放つてその場を後にした。やつぱり自分の目で見ないと気が済まない。現場に行くなつて言われてるけどアンクの無事の確認をしなきや！

「ドム、どうすんだよ。サリア全然振り向いやくれねえぜ」「クソッ、なんだってサリアはあんなクズを気に掛けんのだよ！ あんなクズより俺の方が優れてんだ！ 見てろ……絶対に俺のものにしてやる」

私は爆発現場の工房に来た。そこには先程まで建物だつたであろう残骸が残つてゐるだけだつた。

「ああ、あああああ……」

「アモロソさん!? 来てはいけないと……！」

先生も何かを察して口を噤んでくれた。

「ごめん……ごめんなさい……アンク……！」

「アモロソさん……」

こうなつてしまつてはもう……現実を受け入れるしかないの？ ねえ、あの約束まだ果たしてもらつてないよ？ まだアンクとしたいこといつぱいあるんだよ？

「アンクう……アンクう……」 ポロポロ

「よんだか？」

「！」

サリア side out

「アンク!!」

そう言いながらサリアは俺に抱き着いてきた。珍しいこともあるもんだな。

「おいおい、どうした？ そんな死に別れの恋人を見るような面して？」

「？ あ、アンク？ いつもと雰囲気が違うみたいだけど……」

「アンジユ君!? 無事だつたんですね。一体何があつたんですか？」

「無事……とは言い難いな。一回死んじやつたっていうか殺されたり

「？」  
「！」

おおう、まあ死んだって言つたらこんな反応普通か。

「アンジユ君！ 死んだというなら何故あなたは生きているんですか？」

「冗談でも死んだなどと、笑えませんよ！」

「冗談でこんな事は言いませんよ。まだ身体中に火傷跡も残つてるし」

「アンク。それ本当なの？ だとしたらそれは誰？ 私ちょっとそいつ殺して来ないといけないから早く教えて」

サリア、先生の前でそんなこと言つちやダメだよ。先生サリアの殺意で恐怖マシマシじゃん。

「アモロソさん！ そんな事言つてはいけません！ こういう事は先生たちに任せて——」

「先生に任せたところで犯人が学園内にいたら？ 貴族の多い魔闘師を育成する学園なら体裁の為にもみ消さないといい切れないのでしょう？ そもそもこれは私とアンクの関係を妬んでやつた可能性があ

りますなら私が探して殺す方が手っ取り早いですそれとも先生まで私とアンクの邪魔をするんですか？ そんなわけないですよね？ そんな事したらどうなるか先生がどうなるかも理解してますもんね私は今すぐにでもアンクを殺そうとした奴を冥府に送らなければいけませんので無駄口を叩くくらいなら少しでも情報を整理して寄越してください」

サリア、喋るのはいいがハイライトなんとかしてくれ。先生もう涙目じやんかよ。

「わ、わかりました。あなたも調査に入つて構いません。しかし、こちらの指示に従うことが条件です。いいですね」

「……はい。では調査の続きよろしくお願ひします。私はアンクを介抱しなければいけませんからこれで」

そう言つてサリアは俺の腕を掴んでそそくさと帰ろうとする。そのまま帰宅……ならよかつたんだがそうもいかないのは経験則。邪魔者がやつて来る。

「サリア！ よかつた。無事だつたんだね！ 急にどこか行くから心配したんだよ！」

そう、ドムの4人組である。性懲りもなくサリアを狙つてるのか。いい加減飽きねえのか？

「アンク！ 爆破に巻き込まれたつて聞いたけど無事みたいだな。じゃあサリアは俺たちが送つていくからこれで。じゃあな」

ドム、笑顔で繕つていても分かるぞ。その裏で苦虫を噛み潰したような面してるのが。計画通りに行かなかったのは残念だつたな。だがここから恥かいてもらうぞ♪

「おゝ誰かと思えば『工房のおつちゃんを殺した』ドム君じゃないか。よくまあおめおめとここに来られたものだねえ。恥ずかしくないの？」

瞬間、4人組がこつちに鋭い殺意を向けた。本当の事だろうが。何怒つてんだよ。

「アンク……それどういうこと？」

サリアが鎧びた首振り人形のようにこつちに顔を向ける。その

モーション怖いからやめて。

「どういうことも何も、ドム含めた4人が工房のおっちゃんを殺して工房を俺」と爆破した張本人だよ」

「!!!!!!」

「ド、ドム君！ それはどういうことですか？ それは立派な殺人です！ 隠さずに話しなさい！」

「ドム、返答次第ではあなたの命は無いけど早く答えて。私は今、冷靜さを欠こうとしてるの。さあ早く」

「おいおい待ってください先生。それはこいつが勝手に言つてるだけでしょう？ そんな奴の言うことに信憑性なんかないでしょ。」

ドム、言い逃れ出来て安堵してるけどお前は1つ知らない事がある。

俺は今、悪魔と融合してるんだぜ？

「試運転だ。記憶魔術〈シアター〉展開」

俺の身体はインキーと融合してからインクが体内から出るようになつた。よく考えたら気持ち悪いなこれ。

「ん？ なんだそれ」

「アンク……何やつてるの？」

「強くてニューゲームの特典試運転」

「気にすんな。新しく魔術覚えたから試運転がてらドムの悪行を暴いてやる」

「はあ？ そんなもの無いし、第一出来損ないが魔術なんて使えねえだろ」

「それは見てからのお楽しみってな。因みに今からやるヤツは対象の記憶を劇場公開する魔術だ。これから俺が死んだ時の一部始終を見せてやる。集中すれば演者の顔も本人そつくりに似せられるぞ」「それで俺がやつたように見せかけるってか。第一お前の記憶つていのにも怪しいもんだ」

「ならお前の記憶でも公開しようか？」

「やつてみろよ。どうせ出来ない事を何を自慢げに」

「じゃあやるぜ」

そう言つて俺はドムの頭を鷺掴んだ。そこでインクを流し、記憶を読み込む。どうやつてるかって？　俺も知らん。インキーの不思議

☆パワーだろ。

「うおあ！　てめえ！　なにしやがる!!」

「うるせえだまれ。これでお前の記憶は理解した。後は開演だけだ」

そして俺は詠唱してステージを作る。というかなんで詠唱が歌つぽいんだ？　インキーの趣味か……

俺から流れたインクは徐々に形作り、舞台と演者が出来上がる。ついでに演者の顔をドムの記憶通りに作り上げる。

「？　これって……今朝の」

「そう。これならサリアも知つてゐから、これの少し後の話を見せてやる。勿論音声付きでな」

「「「「一」「二」」

おつほおくようやつと顔色が変わつたな♪　さあ、楽しい時間の始まりだ！

『なんだその目は。まあいいさ。これに懲りたらもう近づかないこつた。これは忠告なんだから俺たちに感謝しろよ？　これはお前のためなんだからな』

「ここは私も知つてる所ね。アンクが今朝やられてた』

「そう。そんでここからは俺たちも本来知らない部分だ』

「……」

ドム。冷汗ダラダラだぞ。後ろの3人も全く喋つてねえな。顔  
真っ青だし www

『よし、行つたな。行くぞ』

『おし。でもなんでこんな周りくどいことするんだ？　普通にボコせ  
ばいいじyanよ』

『わかつてねえな。あいつはたとえ腕折つてもサリアにくつ付いたま  
んまだ。サリアに付く悪い虫は文字通り駆除しないとな』

『おつほおく悪い顔してんねえ！　まああいつには悪いけど、これも

俺たちがサリアと付き合うようになるためと思つて退場してもらおうかねえ』

『ヒツヒツヒツビ／クツクツクツクツク』

『アンクウ、お前は皆の邪魔なんだよ。お前がいるからサリアと喋ることだつてできねえ。悪いけど消えてくれ。それが、皆のためなんだ』

「という訳だ」

「そんな……こんな理由で……」

「ドム君……」

「い、言いがかりだ！ これだつてこいつが見せた幻だ！」

「ほう。ならお前の他の記憶をここで全公開でもするか！ 安心しろよ。サリアや先生にも見てもらうから」

「！」

「さあ！ 第2幕の始まりだ！」

「止めるおおおおおお！！」

「もういい……止めてくれ……止めてくれよお……」

「ツフ」 ドヤア

「あ、アンク……やりすぎ……」

あの後ドムの恥ずかしい過去をフルボイスで全話公開した。途中ドムが割り込んで来そうになつたが、そこはサリアや先生が止めてくれた。てかサリアも喜々として足止めしてたじやねえか。

さて、これで俺の魔術の信憑性は上がつたかな？ かな？ 何なら

もう一回全話公開に加えて番外編も流すけど

「わかつた！ わかつたからもう止めて！」

どうやら懲りたようだ。これで安心。

「じゃあ改めて、おっちゃんを殺して俺を工房」と爆破したのはお前らだよな？」

「……」コクン

「そんな……ドム君、なんでそんな事を！」

「……こいつが許せなかつたから」

「え？」

「こいつがサリアといるのが許せなかつたんだよ！　出来損ないのクズの癖して、幼馴染つてだけでいつもいつもサリアといやがつて！　当つけかつての。だから殺してやろうつて思つたんだ。だつてのになんだよこれ……」

「ドム君……」

「……」

サリアは黙つている。自分のせいで俺が死にかけたのを気に病んだのか？

「ふざけるなよ」「ミ虫が」

……？

「アンクが出来損ない？クズ？低能の虫の分際でよくそんな物言いが出来たものねあんたたちはアンクの優しさに救われていただけだと。いうのにそれをさも自分の力で今の立場を得たと言わんばかりの言い草に虫唾が走るわそれで私に近づくなんておこがましいとは考えなかつたのかしら全くおめでたいことそんな考え方なら魔闘師が聞いて呆れるわこれに懲りたらもう私にもアンクにも近づかないことね本当に死ねばいいのに」

……

……いやまさかサリアがここまで言うとは……てかなんで俺込み？

「……」

ドムなんか固まつちまつてるよ。後ろ3人も呆気に取られてるし。

「さあアンク、行こう。」

……逆らわない方がいいか。何しでかすかわからん。

## 嗤う悪魔に厄来たる

あの後俺はサリアに腕を掴まれ家路についている。

「なあサリア。いい加減離してくれないか？　俺としては歩きにくいんだが」

「ダメ。もうアンクの事は離さないって決めたんだから」

なんでこうなつたんだ？　今朝まで冷たく突き放す感じだつたのに……確かに俺自身サリアに感謝はあれど憎しみはない。だがそれ以上に人間に興味を無くしてしまつた。何というか……今は人間に対して何も湧かなくなつてしまつた。まあこれも<sup>インキー</sup>あいつと融合したからだとは思うがこれはむしろ余計な感情を無くせる事が出来てラツキーだった。

「サリア、何度も言つてるけど俺とは一度と関わんない方がいいって  
「アンク」：なんだよ」

「アンク、何があつたの？今までなら気弱でビクビクしてたのに今はなんか…別人見たいになつて。確かにドム達がやつてきたことを許せる訳はないし私を軽蔑する気持ちを持つてもおかしくない。でもそんなのまるで無かつたような……ねえ教えて。あなたに一体何があつたの？」

……一体全体どうなつたっていうんだ。ここまでサリアが詰め寄つて来るなんて。今までだつたら『ようやくまともに魔法を使えるようになったのね。ほら、さつさと完璧に仕上げてきなさい』つてな感じで俺を心配するなんて事は絶対に無いと断言出来るんだが。なんか言つて面倒な事になつてもこつちが困るし、ここは強めに言つてさつさと諦めてもらうか。

「それを言つて何があるつて言うんだ？それにあんな対応してたお前がいきなり言い寄つて、何が目的だ？まさか俺を闇討ちする算段をドムとでもつけるつてか？」

「わ、私はそんなこと考えてないわ！私はアンクの事を考えて……！」  
「それに俺はもう守つてもらう程弱くはない。お前がどう思おうと俺は「やめて！」

「そんなことは分かつてゐる！でもアンクの口から聞きたくない……それを聞いたら何かが壊れてしまいそうで……」

「……俺は1度死んだつてのに今更何言つてゐるのか、人つてのは1度壊れる方が何かを見つけられる。ソースは俺。

「だから今までの事に目をつぶつて仲良しによししましようつてか？そいつはお前だけの意見じやあねえか。俺の意見は無視か？いつも通りに」

「!? それは……」

「取り繕う必要はねえよ、人が欲望に正直なのは分かつて。そいつをやめろつて言うつもりは無い。言つたところで無駄だからな。お前もその1人つてだけだ」

「そんな言い方……」

「そんな言い方しちまうような環境だつたからな、それはお前も分かることだろ？」

「……」

もう喋らなくなつたのか。もう一押しか？

「1度殺された人間としてはもう人間自身信じるのは賞金のかかつてる犯罪者に對して無条件で犯罪に手を貸すようなもんだ。そんな危ない橋なんぞ渡りたくないつてのは分かつてくれるよな？いくら夢見るアホでもそんくらい理解する頭は持つてるだろ？」

「あ、アホつて……」

「アホだろ、殺されかけたどころか実際殺されたつてのにそれを言うに事を欠いて守らせろ？お前じやなかつたら消し炭にするところだつたぞ。全く……昔の付き合いつてのはめんどくさいよな。お前を殺した後どうなるか目に見えてしまう。まあ、俺たちはもう関わりを持たない方が幸せだよな」

「…………え？」

サリアがこの世の終わりのような表情をしてる。まあ俺は一回終わつたけど。

「だつてそだ？俺は人間を信じない。学校だつて辞めたいくらいだ。そんな奴と一緒になんて不合理の極みだろ？だつたら最初から関

わらざいるのが正解だろ」

「いや、いやよ！なんで関わらないとか殺すとか言うの？確かにアンクを突き放してたのは私が悪いわ。でもこれからやり直せるじやない！その時間はいっぱいある！私はアンクの味方なんだから頼つてよ……私ともつと一緒にいてよお……」

「……」

なんだこのメンヘラは

自分の事をなかつたことにしようとして俺とまだいたい？ならなんで今までの突き放してたんだよつてなるよな。これが普通の感情だよな？ああもう面倒くさい。もうさつさと帰ろ。

「今までの時間をもつと良い関係を築けるように使いたかつたな。まあ次の奴とは上手くいけよ」

「……え？」

「転移魔術〈コミツク〉展開」

「あ、アンク？今なんて……？」

魔術詠唱を終えると、一冊の本が出てきた。中には見たことのないような絵と割り振り方をしていたからどういつたもののかじつくり見たかつたがサリアが鬱陶しいし、さつさと本の中に飛び込んだ。「アンク？……アンク！」

本の中に入り切つたらもうそこに俺はない。本もインクに戻り、そこにシミを作るだけになつた。

「アンク……アンクう……」

「ただいま……」

とはいつても俺一人暮らしなんだけどね。もう寝間着を着る気力も無いし、制服だけ脱いでベッドに突つ伏した。

「はあ……学校に退学届出したい……」

でもこれを出来ない理由がある。それは俺の身内の話になるが両親は王宮の歴史家だつた。ていうか俺の一族が代々そうで、兄貴も去年なつたばかりだ。両親の時にだつたと言つたのは両親が他界した

からだ。確か原因が同僚が嫉妬して魔術実験と称して殺したんだつたか。

俺の両親が死ぬ前に『アンクに学園を卒業させてくれ』と兄貴に残したのだ。だから兄貴はどれだけ俺が出来損ないでも見捨てなかつたし、知識をくれた。兄貴には感謝してる。でも兄貴が裏で陰口を言つてたことも知つてるんだよなあ。まあこんな出来損ないを託されたんだから愚痴の一つも言いたくなるわな。

「んな」と言つても仕方ないか。そもそもそれは俺が原因だつたし、むしろ今までのよく親のいう事聞いてたもんだよ。さて、それよか俺の魔力だな。変質しても使い方がよく分かる」

この世界では魔力の性質から魔術や魔法に派生させていく。例えば火属性の魔力を持つていたらそこから攻撃力を上げたり、水属性なら水を様々な液体に変化させたりできる。俺は『性質不明』、言わば無属性だつた。無属性は全属性を使えるが同時に扱いが困難という人一倍努力を続けてようやく人並に使える程度で言わば出来損ないだ。まあそもそもが素質無かつたから魔術なんてもう無理なんて言われる程向いてなかつたんだけどな……

「でも今なら出来る気がする……『フォック』！」

魔力を込めると手から火が出てきた。よし、簡単な魔法は使えるな。少し前まではこれも一苦労だつたな。

「今日は疲れたし寝るか……しかし悪魔も疲れるんだな……」

そこは生物だからなのか？まあそこは追々考えていけばいいか。

今は寝r……

こうして俺の意識は闇に落ちた。

翌日

「……マジでふざけんな」

俺が朝から機嫌が悪くなるなんてこと普通はない。少なくとも昨日までは朝日を浴びてストレッチをしたらスッキリ起きることが出来ていた。だが今は……

「おはようアンク。今朝のご飯はシチューでいいかな?」

「なんでいるんだ?」

「このために絶賛不機嫌だ。不法侵入だろ? さも当然のようないないでくれよ

「サリア……なんで家にいるんだ? 鍵かけてたはずだが……」

「義兄さんに借りてきたわ。アンクのこと義兄さんも心配なのよ」

「何勝手なことしてくれてるんだ? まさか兄貴に昨日のこと言つたんじやなかろうか……この後面倒臭いことになるのは確定したな。しんどい。

「兄貴を義兄さんつて言うのはやめろ。それに裏じや俺の事を邪険にしてるのは知ってる。それに昨日言つたら、俺に関わるなつて。今まで関わらず居たんだから今後もそれd 「いや」……」

「昨日なら私も言つたはずよ。あなたを離さないつて。あなたのことを思つてているのは本當だもの。性格が変わつてもあなたはあなた。ならあなたを支えるのが私のやk 「いい加減にしろ」 アンク……?」

「昨日言つたこと何も理解してないんだな。俺は関わるなつて言つたのはお前含めた人間に何の感情もなくなつたからだ。そんな奴に付きまとわれていい顔すると思うか? しないだろ。その上で支える? サリアよお、どうやつたつて俺たちの関係は修復不可能なんだからそれでいいじやねえか。これからはお前を思う奴に尽くしてやれよ。俺といても時間の無駄だ。さつさと出ていけ」

「アンク……」、

「なんで何も言わないんだよ。俺の家だからいいものの、これが外だつたら絶対俺が悪人扱いされるだろ。俺の言つたこと間違つてるか? 人格まで否定してきた奴をなんで信じる必要があるって言うんだ。だ。

「……アンク」

「なんだよ」

「私は諦めないから。絶対アンクの気持ちを取り戻して見せるからね」

「そう言いながらサリアは出ていった。俺の気持ち? そんなもん

とつぐにぶつ壊れたわ。

「歯に衣着せた台詞ばつか並べやがつて……」

悪態をつかずにはいられなかつた。今サリアを受け入れたらまた元に戻つてしまいそุดだから……。

## 学園

「おい、あれアンクじやねえか？随分雰囲気変わつたけど……」

「ドムが殺したんじやなかつたのかよ。まあなんにせよ俺らの玩具が消えなくて良かつたなwww」

「おい聞こえちまうぞwwでもまあ、あそこで死んだ方がアンクには良かったのかもなww」

今日も今日とて生徒ゴミどもの声がよく響く。まだ俺のことを今までと同じように考えているんだろうがそれもお終いだな。かかつてきたらやり返すようにしどとか。正当防衛だから問題ない……

「おいアンク!!てめえ昨日はよくもやつてくれたな！おかげでこつちは大恥かいたんだぞ!!」

……早速ドムはつけくん。他の魔術や魔法も試したかつたし、モルモットが自分から実験志願して来やがつた。

「やあドム君！今日も鶏ヘヤーが素敵だねwww赤も相まって全身白にして口を黄色に塗つたら鶏男の完成だよwwwwwwあ、そうだ。昨日はあの後どうなつたんだい？サリアに余りにも惨めな言われ方してたから心配してたんだ。もしかすると俺のモルモットがここ辞めちやつたら他に誰に試そうかつてねwwwwww」

「ぶつ殺す!!」

ドムが右手を手刀につくり魔力を込めて走つてくる。確かにいつの属性は水だつたか。まあ魔法でつくつた水とはいつても真水じゃないから色々試せるんだけどね。

「お、何々？攻めて来るんだ。じゃあ科学実験だ！『塩分を含んだ水溶液に電撃を流したらどうなる』？」

「その前にてめえをぶつた切る!!俺を舐めた罰は、死刑だけだ!!《アツ

クア』！」

ドムの魔力が水の属性を帶びて水流をつくり出した。普通なら体を切られる攻撃だが、こちとら実験したくてウズウズしてるんだよ。

「受け取れモルモット！『バレーノ』！」

簡単な雷魔法。しかしそれも使い方だ。魔力を多く込めれば威力は当然増すし、状況も味方してくれたら更にダメージが入る。真水でないなら電気の通りも良くなるし、人間の体も半分以上は水分だ。電撃が遮断される訳がない。おかげでドムの体は黒焦げ

「あばばばばばば……！」

「あつはつはつはつは!!ねえどんな気持ち？今まで馬鹿にしてきた奴にここまでコケにされてどんな気持ちいい!?ダメだｗｗｗ腹がよじれるｗｗだつて黒焦げだもん！鶏の丸焼きｗｗｗまあオスの家畜の末路なんてこんなもんかｗｗｗｗｗはあ、笑った笑った。朝から気分上げさせてくれてどうもねｗｗｗｗｗ」

こうして手をひらひらさせてその場を去る。途中周囲の奴らが何か言つてたような気がしたがそんなものはなかつた（すつとぼけ）。

「おい、アンクが来たぞ。あいつまだ懲りないんだな」

「あいつも難儀だよなあ。ドム達にボコされる為に来てるようなもんなんだからさ」

ガラガラと古い扉を開けるといつも通りの教室にいつも通りのクラスマイトがいつも通り俺を見る。いつもご苦労な事だな。まあ、気にすることもない。さつきと自分の席に着くとするか。

俺が席に座ると同時に先生とサリアが入つてくるサリアが自分の席に座り、先生が話を切り出した。

「えー今日はホームルームの前に転校生を紹介します。遠い国から來たそうなので色々教えてあげてくださいね。

ではハルヤくん、入つて来てください」

それが聞こえて一人の男が入つてくる。そいつは黒髪に茶色の目をしていてこの國の人間じゃないってのは一目で分かつた。あと同じ年にしては幼さが残る。

「俺は片桐春夜！この国のこととはよく知らないけど、皆そのところ色々と教えてください！よろしくお願ひします！！」

そして俺は後に辟易する。

こいつは今の俺には天敵たつだんだ。